津田青楓宛て書簡にみる寺田寅彦の二つの世界

四宮義正

寺田寅彦の二つの世界といえば、大正 9 年 5 月の『渋柿』に掲載され、後に単行本『柿の種』の巻頭を飾った次の文がよく知られている。

日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、ただ一枚の硝子(ガラス)板で仕切られている。

この硝子は、初めから曇っていることもある。

生活の世界の塵に汚れて曇っていることもある。

二つの世界の間の通路としては、通例、ただ小さな狭い穴が一つ明いているだけである。

しかし、始終両(ふた)つの世界に出入していると、この穴はだんだん大きくなる。

しかしまた、この穴は、しばらく出入しないでいると、自然にだんだん狭くなって来る。

ある人は、初めからこの穴の存在を知らないか、また知っていても別にそれを捜そうともしない。

それは、硝子が曇っていて、反対の側が見えないためか、あるいは……あまりに忙しいために。

穴を見付けても通れない人もある。

それは、あまり体が肥(ふと)り過ぎているために……。

しかし、そんな人でも、病気をしたり、貧乏したりして痩せたために、通り抜けられるようになることはある。

稀に、極めて稀に、天の焔(ほのお)を取って来てこの境界の硝子板をすっかり熔(と)かしてしまう人がある。

ここでは、もう一つ、絵入りで説明している津田青楓宛ての書簡を紹介する。

大正 7 年 2 月 3 日

図は小生の二つの世界で、下の世界から折々上の世界へ見物に行くので世の中がまづいやにならずにすむようなものかと思ひます。

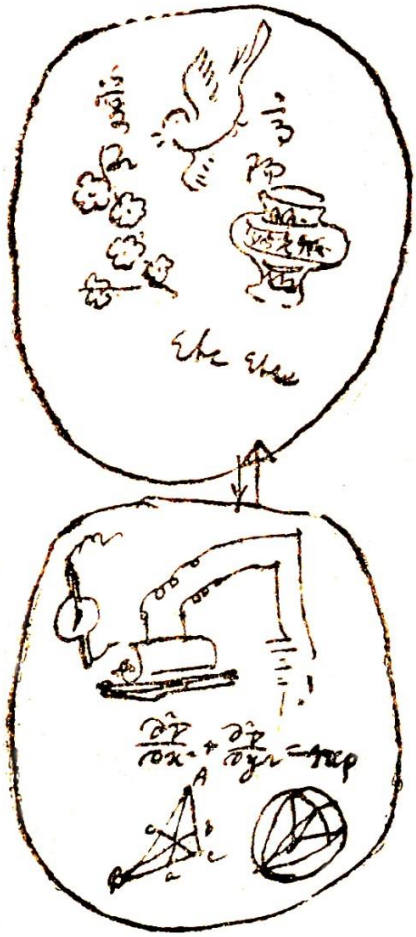
（図は次ページ右上）

この絵について、『槲』第 50 号で上田壽さんが「その絵は二つの世界を表していて、一つは寅彦の専門の「研究の世界」であり、クーリッジ管という X 線発生装置、起電機、微分方程式、幾何学などが線で囲まれている。もう一つは、その絵の上段に、高陽、愛石な

どの名前入りで梅花、小鳥、壷等「芸術美の世界」があり…」と説明している。

『柿の種』と比べると、日常生活が研究、詩歌は芸術美となって、少し違うようである。

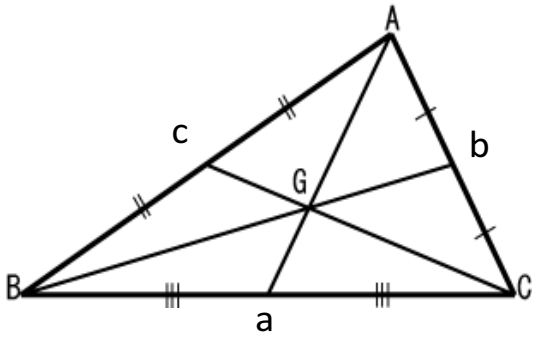
ここでは、書簡の絵について、個別に詳しくみてみよう。



津田青楓宛て書簡の絵

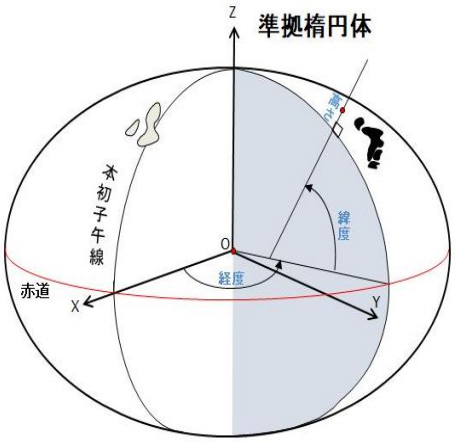
〔研究の世界〕

○三角形の重心を示す幾何図形。（下図）



○地球の中心を原点にする測地座標系。（右下図）

本初子午線はイギリスのグリニッジ天文台の跡を通過する子午線。寅彦の専門である地球物理学関連の図である。



測地座標系

○微分方程式。特にポアソン方程式という基本的な偏微分方程式である。

Vを電位、ρを電荷密度としたとき

２次元で

$$\frac{\partial^2 V}{\partial x^2}+\frac{\partial^2 V}{\partial y^2}=4\pi\rho$$

と表わされる。

○X 線発生装置。次ページ上の図とよく似ている。寅彦は X 線を使用した結晶構造の解析で学士院恩賜賞を受賞しているので、馴染みの実験装置であったと思われる。

〔芸術美の世界〕

○文字

・**Ehe**、**Ehen**:ドイツ語で婚姻、結婚の意味。Ehen は Ehe の複数形。二つの世界を結びつけるという意味であろう。

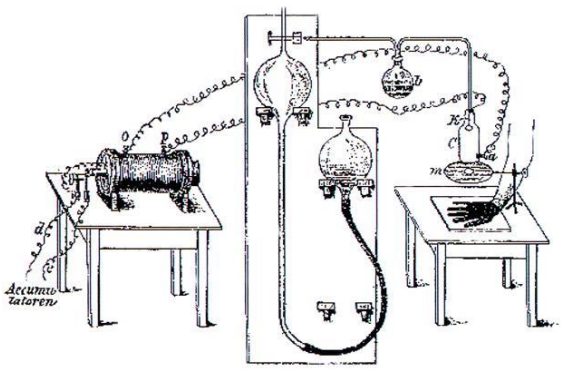
・**愛石**：生没年不明。江戸時代、文化・文政(1804～1830)頃の画僧。名は眞瑞、字は黙叟、愛石(あいせき)はその号。紀州の人。

・**高陽**：中山高陽(こうよう)。享保 2 年（1717）―安永 9 年（1780)。江戸時代中期の日本の南画家、書家、漢詩人。土佐国堺町（現高知市堺町）の豪商「阿波屋」の次男として生まれる。(2 人の情報は Wikipedia による。)

高知市堺町に「誕生地」の記念碑がある。また、高知市薊野(あぞうの)に墓がある。

○絵

梅の花、楽しそうに飛んでいる鳥、壺の絵である。それぞれ詳しく描いている。高陽または愛石がこのような絵を描いていたのかもしれない。



第一高等学校にて水野敏之丞教授らの実験に使用せし装置
出典：後藤五郎著『日本放射線医学史考・明治大正編』

X 線発生装置
『山川健次郎と藤田哲也展図録』収載

中山高陽誕生地の記念碑（筆者撮影）

寅彦は青楓の絵を非常に高く買っていたが、二つの世界の絵を画いた書簡で「なる程愛石という人の絵にも、何処か青楓君の絵と共通な分子を含んで居るので、君が共鳴されるのも尤もと思います。しかしよく考えて見ると、どうも青楓君の方が数等妙味があると思います。愛石の絵には他人の企及し難いと思う点がどうも少ないという気がしますが如何でしょう。」とある。

寅彦の日記、大正 7 年 1 月 13 日に「三時頃阪井老人来訪　次で津田野上両君来る、高陽の画を見せ青楓君模写す」とある。津田も『寅彦と三重吉』(昭和 22 年、万葉出版社)でこの日のことを次のように回想している。

> 寺田さんのお父さんが書画好きで目ぼしいものを少しばかり東京へ持ってきている。その中に高陽山人というのが、地方的な画家だが一寸面白い画だと思うからおひまの時一度見にきてくれ、というので野上君を誘って出かけた。(中略)
>
> 画を出してもらって私は高陽山人を、寺田さんにチビタ書筆と子供が学校で遣う絵

具をかりて模写した。その画は表装をして今も時々床にかけてたのしんでいる。日本とも支那とも分からぬ藁屋の中に、支那風の椅子に二人の文人か隠士のような男が、一人は読書している、一人はぼんやりしている。流があってその家への橋がかかっている。松や何かの木が屋の上にかぶさって、遠くに山が見える。……

最後に壷の絵であるが、珍しい形で、装飾も描き込まれている。いろいろ調べてみたが、そっくりな壷を見つけることはできなかった。しかし、台付壷型土器に近い形のものがあった。右に写真を示す。寅彦の絵では中央部の横方向のふくらみが、もっと大きく枕のように出ている。なかなか製作が難しそうである。

台付土器（平畑遺跡・縄文中期）
飯田市上郷考古博物館蔵

寅彦の一番の理解者だった小宮豊隆は岩波文庫『寺田寅彦随筆集』(一）の「後語」で次のように書いている。

ただ寅彦の書くものの忠実な読者としての私の頭の中には、どういうものか、人類の選手として、物質と精神との間に堅固で不朽な橋を架けようとして、寸陰を惜しんで努力している寅彦の姿が、相当はっきり結晶しているのは、不思議である。もちろん寅彦は心理と物理との限界をはっきり自覚して、いやしくも物理学の範囲から逸脱しそうなおそれある事には、断じて足を踏み入れなかった。その点で寅彦は、物理学者として、身を持する事きわめて峻厳（しゅんげん）であった。それにもかかわらず寅彦が、椿の花の落ち方や藤の実の飛び方やとんぼの並び方に興味を持つ一方、電車の乗客や街頭の群集や言語の分布を支配する法則を発見しようと努めているところなどをながめていると、私の目の前で、物質と精神とを隔離する堅牢（けんろう）で分厚な壁が、次第次第にその厚みを失い、しまいには今一打ちつるはしを打ちこみさえすれば、それはがらがらと崩れ、双方の世界は無礙自在（むげじざい）に流通し合うのではないかとさえ思われて来るのである。無論この最後の一打ちは、一大力量を必要とするものに違いなかった。そうしてこの一大力量は、寅彦どころではなく、およそいかなる人間にも与えられていないものなのかもしれなかった。

この小宮の説明によれば、二つの世界の図は、「物質と精神」あるいは「物理と心理」を表しているともいえる。